

ペテロ第一5章 「力強い神の御手の下に」

1A 牧会 1-5

1B 模範となる長老 1-4

2B へりくだる若者 5

2A 不動の者 6-11

1B ゆだねる心 6-7

2B 悪魔への抵抗 8-11

3A 真の恵み 12-14

本文

ペテロ第一5章を開いてください。私たちのペテロ第一の手紙の学びは、これで最後になります。教会外からの迫害で、苦しみ始めた小アジアの兄弟たち。そしてこれから、一段と激しい迫害と殉教が迫って来ることを、皇帝ネロのキリスト者迫害の渦中にいたペテロが警告しています。その中で、彼らが励まされ、しっかりと信仰に立ち、真実な恵みの中で強められること。そして、神の栄光の中に招き入れられているという恐れ多き恵みがあります。

1A 牧会 1-5

そこでペテロは、彼らとその恵みの中にしっかりと立っていてくれることを願い、まず、長老たち、牧者たちがしっかりと牧会をすることによって教会が強められ、それで忠実な者として、キリストの証し人として立つことができると考えました。

1B 模範となる長老 1-4

1 そこで、私は、あなたがたのうちの長老たちに、同じく長老のひとり、キリストの苦難の証人、また、やがて現われる栄光にあずかる者として、お勧めします。

ペテロがこのようにして長老たちに対して勧めています。自身、教会のリーダーとしてここを読むと、ペテロがいかに謙遜で、柔和な人であるかを感じます。「同じく長老のひとり」と自らを他の教会の指導者と同じところに置いているからです。彼は、確実に教会においては「主だった人」の部類に入りました。しかし、初代教会において彼も、また他の使徒たちも、私たちが想像しそうな階級はありませんでした。もちろん、霊的に指導的な立場に着いていますから、権威はあります。けれども、彼らは「仲間」という言葉、「私たち」という言葉を手紙の中で使い続けて、決して自分を人々よりも上にいるという支配する者として振る舞わなかったのです。例えば、ペテロとヨハネが足萎えの男を主の御名によって立たせたことによってサンヘドリンで捕らえましたが、釈放後、「仲間のところに行き、祭司長たちや長老たちが彼らに言ったことを残らず報告した。(使徒 4:23)」と

言っています。そしてこれを聞いた人々はみな、心をつにして、神に向かって祈ったとあります。ここに出て来る使徒ヨハネも、黙示録の書き出しで自分のことを、こう紹介しました。「あなたがたの兄弟であり、あなたがとともにイエスにある苦難と御国と忍耐とにあずかっている者(1:9)」

ところで、「長老」という言葉は、旧約聖書、また新約聖書においても数多く使われている言葉です。モーセがイスラエル人たちをエジプトから連れ出し、荒野の旅を導きました。二百万、三百万といわれる人数が旅をしているのですから、その中でいろいろな問題が発生します。傷害事件や、貸し借りの間の問題、その他もろもろの問題があったことでしょう。その仲裁と調停を、モーセ一人で行なっていました。しかし、モーセの舅であるイテロが、「あなた一人だけでこのようなことをしていたら、あなたも、また民も疲れ果ててしまいます。あなたは民全体の中から、神を恐れる、力のある人々、不正の利を憎む誠実な人々を見つけ出し、千人の長、百人の長、五十人の長、十人の長として、民の上に立てなければなりません。(出 18:18,21 参照)」と言いました。それでモーセは、言われたとおりに民のかしらを選びましたが、彼らが長老でありました。神を恐れて、不正を憎み、そして人と人との間をさばくことのできる判断力のある人です。治めることのできる人です。ですから新約聖書においても、教える能力があり、誠実で、神を恐れる人が指導者となり、彼が「長老」と呼ばれます。

そして、「キリストの苦難の証人」と言っています。ペテロは、イエスがリンチを受けられていたのを見ていました。火に当たっていて、「彼と同じ仲間でしょう？」と聞かれて、彼を知らないと言っていました。そして十字架の時にどこにいたか書かれていませんが、この方が苦しまれたことをそのまま見て行きました。そしてまた、いま自分自身がキリストの苦しみにあずかる者となり、それゆえ「キリストの苦難の証人」と言っています。

さらに、「やがて現われる栄光にあずかる者」と言っていますが、ペテロはイエスの苦しみだけでなく、栄光も目撃しました。高い山でイエスさまが変貌して、光り輝いているのを見ました。そして、甦られて、天に昇られ、父なる神の栄光の中に戻られたことも知っています。そして今、自分自身がその栄光にあずかります。既に兄弟たちに、4章13節でそのことを話していました。「むしろ、キリストの苦しみにあずかれるのですから、喜んでいなさい。それは、キリストの栄光が現われるときにも、喜びおどる者となるためです。」

2 あなたがたのうちにいる、神の羊の群れを、牧しなさい。強制されてするのではなく、神に従って、自分から進んでそれをなし、卑しい利得を求め心からではなく、心を込めてそれをしなさい。

ペテロは、教会の牧会者に対して語っています。先に長老と言っているのに、どうして牧者なのでしょうか？新約聖書では、同一人物として語られています。パウロが、エペソにいる教会の長老たち(使徒 20:17)に、語りました。「20:28 あなたがたは自分自身と群れの全体とに気を配りなさい」

い。聖霊は、神がご自身の血をもって買い取られた神の教会を牧させるために、あなたがたを群れの監督にお立てになったのです。」長老たちに対して、神の教会を牧しなさいと命令し、かつ「監督」にお立てになったとも言っています。ここペテロ第一 5 章 2 節でも、日本語訳には出て来ませんが、本当は「心を込めて監督しなさい」と書いてあります。これは、これらが身分ではなく、あくまでも働きであることをよく表しています。長老ということは、教会を治めるという働きを指しています。そして監督は、その文字通り教会全体を監督、全体を見て回っています。そして牧者は、教会の人々を養い、世話し、守り、導く働きをします。

ペテロは再びここでも、「あなたがたのうちにいる」と言って、支配階級のようなものではないことをはっきりと示しています。あなたがたの下にいる、とは言わずに、あなたがたの内にいる、と言っているのです。なぜなら、長老たち自身も神の羊の群れの一部であり、羊たちなのです。それから、「神の羊の群れ」と言っていて、羊たちが誰に属しているかを明確にしています。自分の羊なのではありません、神の羊です。イエス様が、いかようにして信者たちが神の羊であることを教えておられます。「ヨハネ 10:2-4 しかし、門からはいる者は、その羊の牧者です。門番は彼のために開き、羊はその声を聞き分けます。彼は自分の羊をその名で呼んで連れ出します。彼は、自分の羊をみな引き出すと、その先頭に立って行きます。すると羊は、彼の声を知っているの、彼について行きます。」イエス様の声と、そうでない人の声とを聞き分けることができます。そういった、イエス様の声を聞いている羊の群れが、自分に割り当てられて与えられているのであり、その群れを牧しなさい、と命じられているのです。次、3 節に出て来ますが、自分が支配するものではありません。

そして「牧する」という言葉についてですが、長老と同じく、旧約時代から新約までずっと出て来る言葉です。ダビデが主に愛されていた、その理由は、「正しいところで彼ら(イスラエル)を牧し、英知の手で彼らを導いた。(詩篇 78:72)」からであると、王であるダビデは、イスラエルの上に立っただけではなく、彼らを愛し、養い、世話をしていました。エゼキエル書には、その反対に、イスラエルを牧していない者たちに対する神のさばきのことばが書かれています。「ああ。自分を肥やしているイスラエルの牧者たち。牧者は羊を養わなければならないのではないか。あなたがたは脂肪を食べ、羊の毛を身にまとい、肥えた羊をほふるが、羊を養わない。弱った羊を強めず、病気のものをいやさず、傷ついたものを包まず、迷い出たものを連れ戻さず、失われたものを捜さず、かえって力づくで暴力で彼らを支配した。彼らは牧者がいないので、散らされ、あらゆる野の獣のえじきとなり、散らされてしまった。(34:2-5)」指導する者たちが、その人たちの世話をするのではなく、かえって自分の利益を求め、人々を虐げることへの、責めの言葉です。そして新約聖書でイエスは、ペテロに対して、「羊を飼いなさい。」と言われました。ペテロに、「あなたは、わたしを愛しますか。」と言われました。ペテロが「愛しています」と答えると、「わたしの小羊を飼いなさい。」「わたしの羊を飼いなさい。」と言われました。ペテロが漁師であるのに、羊を飼うのは畑違いですが、けれどもこれから、自分の能力で歩むのではなく、砕かれた心で主の力に日々頼って、与えられた人々を、みことばで養っていく働きに従事するのです。ペテロは、「神の羊の群れを飼いなさい。」

と言ったとき、自分がイエスさまから命じられたその使命を他の教会指導者たちにも伝えています。

牧者の働きは、その主要なものは「養う」ことです。羊を食べさせないといけません。これを、教会の指導者は、霊の食べ物である御言葉によって行ないます。それから、「世話をする」ことがあります。ただ教えるだけでなく、祈り、気かけ、個人的に話しかけ、励ましたり慰めたり、また助言も与えます。そして、人生の分岐点になるようなところで共にいるということも、含まれるでしょう。それから、「守る」ことがあります。羊はいつも狼に狙われています。偽りの教えや行動、こういったものが教会にも入り込みますが、力をもってそれを阻止します。見張っています。そして、「導く」ことがあるでしょう。けれども羊がそうであるように、それほど遠くのところを見られるわけではありません。方向性を示すと同時に、足並みを揃えて示していく必要があります。

そして、「強制されてするのではなく、神に従って、自分から進んでそれをな」しなさいと言っています。これは、「怠惰」について取り扱っています。しっかりと熱心にやっていくべきなのが、「やるべきことをやっていたら、いいでしょう。」といい加減になることです。しばしば、牧師の生活と主婦の生活が似ていると言われますが、「やろうと思ったら、あまりにも大きく、沢山の事がある」のですが、「手抜きすれば、いくらでもできる」ということです。平日は、適当に遊んで、週末に適当に、他の人の説教を借用して話す、なんていうことが現に起こります。ですから、ペテロをイエス様が召されたように、「神に従って」やっていくということ。そして、その召しに、「自分から進んで」成し遂げていくことです。

それから、「卑しい利得を求める心からではなく、心を込めてそれをしなさい」と勧めています。怠惰が一つの問題であれば、貪りという問題もあります。使徒パウロは、福音宣教者が物質的なことで支えられることは、御心にならなっていると教えました(1コリント 9:1、1テモテ 5:17-18)。このことについて、教会はないがしろにしてはいけませんが、この権利をパウロは、状況に合わせて放棄している姿も見ます。彼は天幕作りとしていました。けれども、牧会者が世の中でいう安定した職、雇用先であるかのように考えていくことは決してしてはいけません。だから監督の資格として、「金銭に無欲(1テモテ 3:3)」とあります。

3 あなたがたは、その割り当てられている人たちを支配するのではなく、むしろ群れの模範となきなさい。

先ほど説明したとおり、牧しているのは、あくまでも「その割り当てられている人たち」であります。神の恵みによって、自分に割り当てられているのであって、自分の下に人々を恣意的に集めるものではありません。ですから、「群れの模範となきなさい」と言っています。焦点が変わってきます、自分にきちんとついてきてくれるのか、ということではなく、自分が主に仕えること、主に従うこと、主との交わりがあること、それを行なっていて、それで初めて人々が同じように主に仕え、従い、主と

交わることができるということです。注解書に、教会の財政についていつも大変であったという教会があったことが書かれていました。けれども、その牧師が辞めて初めて分かったことがあったそうです。彼自身が献金をきちんと行なっていなかった、というのです。自分が主によって導かれていないところに、人々を導くことはできません。パウロがテモテに勧めました、「1テモテ 4:12 年が若いからといって、だれにも軽く見られないようにしなさい。かえって、ことばにも、態度にも、愛にも、信仰にも、純潔にも信者の模範になりなさい。」

4 そうすれば、大牧者が現われるときに、あなたがたは、しぼむことのない栄光の冠を受けます。

これらのこと、牧することをしっかり行なっていく心の動機というのは、ここにあります。自身は牧者なのですが、先ほど話したように羊であるのです。神の羊の群れの一部なのです。ですから、イエスを大牧者として仰いでいます。この方が再臨される時に、私たち一人一人は栄光に姿に変えられます。栄光の中に入ることができるのです。そして、栄光の冠を受ける、報いを受けるのですが、ここに牧会をする動機があるのです。人を喜ばせるのではなく、主を喜ばせることに焦点を当てます。主に仕えることにおいての、大原則です。人をみな、喜ばせることはできません。また、人を喜ばせることが目的となつてはいけません。ただイエスを喜ばせていけばよいのです。主に仕えているということを知っていれば、気が楽になるし、また別の意味で、良い意味で緊張があります。

2B へりくだる若者 5

5 同じように、若い人たちよ。長老たちに従いなさい。みな互いに謙遜を身に着けなさい。神は高ぶる者に敵対し、へりくだる者に恵みを与えられるからです。

キリスト者が苦しみの中にあつて、しっかりと信仰に立つことをペテロが勧める中で、しっかりとした牧会が一つにありました。次に、そうした指導にきちんと従うということがあります。大事なものは、「同じように」という言葉です。長老は、大牧者であられる主に仕えるというところにおいて責任があります。そして若い人たちは、長老の指導に従いながら主に従うというところにおいて、責任があります。ここでの「若い人」というのは、経験が少ないということです。もちろん実際の年齢が若いということもあります。けれども、信仰的にそうです。テモテ第一 3 章 6 節に、監督は「信者になったばかりの人であつてはいけません。高慢になって、悪魔と同じさばきを受けることにならないためです。」とあります。

従いなさいという命令は、次に「互いに」とあるように、キリスト者が全員、実践しているべき内容ですね。ペテロ第一の中にも、王を尊び、人間の制度に従いなさい、主人に主のゆえに従いなさい、妻は、みことばに従わない夫であっても、無言の振る舞いによって、神のものとなるようにし

なさいという命令がありました。そして、「謙遜を身に着けなさい」とペテロは言います。これが服従する時に必要なことです。従えない人は、なぜか、自分の尊厳がなくなる、卑しめられるというように考えます。いいえ、そうではありません、「他者を尊び、他者のことを顧みている中で、自分のことを忘れていた」と言ったほうがよいでしょう。謙遜とは自分を卑しめることが目的ではなく、自分が犠牲になっても他者を愛する、愛に基づくものです。

そして、箴言 3 章 34 節を引用していますね、ヤコブも 4 章 6 節で引用しているものですが、「あざける者を主はあざけり、へりくだる者には恵みを受ける。」とあります。神の恵みを知るためには、へりくだりが必要です。恵みを受け入れるのは、自分をへりくだらせないとできません。恵みとは、自分の行なっていることは全く評価されないからです。自分は霊的な乞食だからこそ、神のしてくださることを恵みとして受け入れることができます。

2A 不動の者 6-11

1B ゆだねる心 6-7

6 ですから、あなたがたは、神の力強い御手の下にへりくだりなさい。神が、ちょうど良い時に、あなたがたを高くしてくださるためです。

長老に従い、互いに謙遜にし、そして、これらすべての背後にある神の主権を受け入れなさい、というのがここに書いてあることです。長老に従えない人は、主を立てておられるということを受け入れられないからです。互いに謙遜になるということができない人は、その相手が主によって置かれている人なのだ、ということを受け入れられないからです。しかし、その背後に「神の力強い御手」があるのです。祈りの中で、主の前にへりくだります。そして従うところに、神ご自身の主権で、高められるのです。イエス様が最後まで神に従順であり、僕となっておられましたが、ゆえに神がイエスを引き上げ、天に昇らせ、右の座に着かせてくださいました。全て主なる神が行なわれていることであり、「ちょうど良い時」とあるように、時を神は支配しておられますから、自分も高められるのです。

信仰者は、神がちょうど良い時に用いられます。モーセが 80 歳の時に用いられました。ヨセフは、30 歳になって囚人の身からエジプトの宰相となりました。ダビデもサウルに追われて、そして自分の手を血で汚すことなく、イスラエルの王となりました。時が、その人の信仰を練り清めます。なぜなら、時は神のもの、神の主権の領域だからです。

7 あなたがたの思い煩いを、いっさい神にゆだねなさい。神があなたがたのことを心配してくださるからです。

今、神の恵み、そして神の時について話しているので、ペテロは、神を信じて他のことは任せると

いう、まっすぐな信仰を求めておられます。思い煩わないということです。父なる神が、私たちの代わりに心配してくださいませ。パウロもピリピ人への手紙の中で話しました。「何も思い煩わないで、あらゆるばあいに、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。(4:6)」

2B 悪魔への抵抗 8-11

そしてペテロは、これまで述べてきた、キリスト者の受ける苦しみについて、その迫害について、本質的な議論を始めます。

8 身を慎み、目をさましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたけるししのよう、食い尽くすべきものを捜し求めながら、歩き回っています。9 堅く信仰に立って、この悪魔に立ち向かいなさい。ご承知のように、世にあるあなたがたの兄弟である人々は同じ苦しみを通して来たのです。

世にある苦しみ背後に、悪魔がいるということです。彼らの今、受けている苦しみも大変ですが、これから大迫害がアジア地方にやってくるでしょう。それで、獅子が食い尽くそうとしている、と表現しているのです。イエス様の苦しみには、闇の力があることを主ご自身がお話しになっていました。ユダヤ人がイエス様を殺そうと思っておられたことには、「あなたの父は悪魔である」とまで言われました。その憎しみや殺意は、悪魔から吹き込まれていたのです。そして黙示録の七つの教会の一部に、迫害の背後にある悪魔の存在をはっきりと主が述べておられます。「2:9 ユダヤ人だと自称しているが、実はそうでなく、かえってサタンの会衆である人たちから、ののしられていることも知っている。」「2:13 わたしは、あなたの住んでいる所を知っている。そこにはサタンの王座がある。しかしあなたは、わたしの名を堅く保って、わたしの忠実な証人アンテパスがサタンの住むあなたがたのところで殺されたときでも、わたしに対する信仰を捨てなかった。」「3:9 見よ。サタンの会衆に属する者、すなわち、ユダヤ人だと自称しながら実はそうでなくて、うそを言っている者たちに、わたしはこうする。見よ。彼らをあなたの足もとに来てひれ伏させ、わたしがあなたを愛していることを知らせる。」ユダヤ教が悪魔に触発されているわけではありません。ユダヤ教であろうが、ペルガモの町の皇帝礼拝であろうが、キリストにつく者ということだけで、憎しみ、迫害をするということに悪魔が背後にいる、ということです。

「あなたがたの敵である悪魔」と言っていることに注目してください。敵視し、敵意を抱くのは、迫害者に対してではありません。敵は飽くまでも悪魔なのです。敵のために祈り、祝福しなさいというときに、その敵対行為までも愛しなさいと言われていていると勘違いしている人々がいます。いいえ、悪は決して受け入れません。そして悪魔に対しては抵抗しますが、その人々を憐れみ、執り成し、祈るのです。

「身を慎み」というのは、酒に酔いしれていない、しらふというのが元々の意味です。霊的な識別力をしっかり用いるということです。同じように、「目をさましていなさい」というのは、霊的に眠っていないということです。ペテロは自分の失敗を考えていることでしょう、彼は身を慎むことを怠り、目を覚ましていなかったのが、イエス様が捕えられる時に剣を出し、かつ敵のたき火のところで主を三度、知らないと言ってしまいました。このように、私たちは霊の戦場の中に置かれていることを知って、戦いのための武装をする必要があります。

そして、「堅く信仰に立って、この悪魔に立ち向かいなさい。」とあります。苦しみや試練があると、何が試されるかと言いますと、信仰そのものです。しかし、だからこそ我信ず、と告白するのです。テサロニケの人たちが苦難の中にあっても、それでも信仰に立っているのを見て、パウロはこう言いました。「あなたがたが、主にあって堅く立っていてくれるなら、私たちは今、生きがいがあります。(1テサロニケ 3:8)」立ち向かうとは、立って対峙するということです。最前線にいる時は、猛烈な反抗が敵陣からあります。しかし、最前線を固守するために、一步も引きさがりません。これが、霊的に「悪魔に立ち向かう」ということです。悪魔に立ち向かう、大前提は、上官であり將軍である神に従うこと、そしてその命令を厳守すること、そしてその命令を固辞することによって、敵に攻め込ませないようにします。

そして、「世にあるあなたがたの兄弟である人々は同じ苦しみを通して来たのです。」と言っています。これは慰めの言葉です。自分たちだけが特別なのではない、他にも苦しみを通っている兄弟たちがいるのだということを知るのです。世界宣教の会議に出ると、どこの国も同じように苦しみを通っています。日本だけが宣教が大変なのではないのです。

10 あらゆる恵みに満ちた神、すなわち、あなたがたをキリストにあってその永遠の栄光の中に招き入れてくださった神ご自身が、あなたがたをしばらくの苦しみのあとで完全にし、堅く立たせ、強くし、不動の者としてくださいます。11 どうか、神のご支配が世々限りなくありますように。アーメン。

ここは、ペテロの手紙の集約のような言葉になっています。まず、私たちは、「あらゆる恵みに満ちた神」に出会いました。キリストの血潮を注がれるように選ばれて、新たに生まれ、天における資産を受け継ぐ者とされました。そして教会で奉仕する時も、「4:10 神のさまざまな恵みの良い管理者」と言っていました。そして、「永遠の栄光」の中に招き入れられています。これもペテロは初めから強調していました。天の資産が蓄えられていて、主の再臨の時に信仰に賞賛と光栄と栄誉に至るということ、そして苦しむ時は、栄光の御霊が、あなたがたの上にとどまる、ということ。

そして、これが「永遠の栄光」と強調していることがあります。それは、「しばらくの苦しみ」だからです。とあります。この地上で生きている時は少ないことをペテロは強調していました。そして、しばらくだからこそ、耐え忍ぶことができます。そして苦しみを通して、「完全にされ、堅く立ち、強くな

り、不動の者」となります。ここが、不信者と信者の分かれ目です。信者は苦しみによって成熟へと向かいます。そして信仰が堅くされます。そして主から強められます。そして、不動の者、つまり信仰が揺るぐことなく動じないということが起こるのです。木は、ひどい嵐が襲ってきても引き抜かれることがないのは、根を深く張っているからです。けれども、その木は、ふだんから、頻りに風に吹かれていることによって、さらに深く根をはります。いつも風によって吹かれているのに、根を深く張り、実際に嵐が襲ってきたときに、耐えることができるのです。私たちも、信仰の試練がいつもあり、いろいろな苦しみがあり、そして大きな苦難が与えられても、それでも動じない者になることができます。

そして、こうした信仰者の姿によって、「神のご支配が世々限りなくあ」ることが証しされます。

3A 真の恵み 12-14

12 私の認めている忠実な兄弟シルワノによって、私はここに簡潔に書き送り、勧めをし、これが神の真の恵みであることをあかししました。この恵みの中に、しっかりと立っていなさい。

シルワノというのは、おそらく使徒行伝におけるシラスのことです。パウロの第二宣教旅行において、彼と同伴した奉仕者です。ペテロはこの手紙を書くときに、その筆記をシラスに行なわせたようです。そして、おそらくシラスに手紙をたくして、小アジアの教会に送ったのだと思われます。彼を「忠実な」と言っています。これが奉仕者の資質です。

そして、「これが神の真の恵み」と言っています。ペテロは簡潔に、苦しみが無いことが恵みではなく、苦しみの中でなおのこと満ちあふれる恵みについて話していました。そこに立っていなさいという勧めです。

13 バビロンにいる、あなたがたとともに選ばれた婦人がよろしくと言っています。また私の子マルコもよろしくと言っています。

ここの「婦人」は教会とも訳することができる個所です。そして「バビロン」ですが、これは二つの解釈があります。実際のバビロン、すなわち現在のイラクの地域であるということと、もう一つは、ローマということです。ローマでの迫害を受けていたので、直接書かないで、暗示的に書いているという可能性があります。そして、「マルコ」は、あの福音書を書いたマルコですが、ペテロは彼を「私の子」と呼んでいます。歳でも親子のような差があったでしょうし、また、マルコはいつもペテロといっしょにいたと考えられます。マルコによる福音書は、ペテロが何度も語ったことを書いたと言われています。マルコは、その福音書の中で、イエスさまが捕らえられるとき、裸のまま逃げた少年として登場します。

14 愛の口づけをもって互いにあいさつをかわしなさい。キリストにあるあなたがたすべての者に、平安がありますように。

愛の口づけとは、もちろん恋愛の口づけではありません。現在でも中東では、あいさつとしてほおに口づけします。親愛のしるしです。あなたがたに、平安がありますように、ではなく、「キリストにある」あなたがたに、平安がありますように、となっています。キリストのうちにあって、初めて平安があります。そしてその平安は、キリストのうちにいるすべての者に共有されています。